

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、15 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、
「や」などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書き
なさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の○の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 議会に諮る。
- (2) 定款を確認する。
- (3) 費用を補填する。
- (4) 極彩色の絵。
- (5) 天衣無縫な作風。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 干し柿がコを吹いている。
- (2) ヨウサン農家。
- (3) 流行にビンジョウする。
- (4) 運動でタイシヤを上げる。
- (5) イシヨクドウゲンの教え。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

「カバヒコ」は公園にあるカバの形をした遊具で、自分の体の治したい部分と同じところを触ると回復すると言われている。運動が苦手な「ぼく」（勇哉）は、小学校の駅伝大会のメンバーをくじ引きで決めることになった際、足を捻挫したと嘘を言っしまい、くじ引きに参加しなかった。その後本当に足の痛くなった「ぼく」は伊勢崎さんが経営する整体院を受診した。

翌日の朝、少し早起きするとぼくは、登校の前に遠回りをして、ひとりで日の出公園に向かった。

カバヒコに会うためだ。

「楽しいこと」なんてすぐには思いつかなかったけど、カバヒコのことを考えるとちょっと安らいだ気持ちになる。

誰もいない公園に着くと、ぼくはカバヒコのところまでまっすぐ歩いていく。カバヒコがぼくを見て笑ってくれたように思えた。

なんだかまるで、約束して待ち合わせしたみたい。

伊勢崎さんの言うとおり、整体院に一度行ったからってたちまち足の痛みがなくなったわけじゃない。だけど昨日はぐっすり眠れて、気分がすっきりしていた。

体と話をするって、どうやってやればいいんだろう。

走るのがイヤで、駅伝に出たくなかったっていうことは、間違いない。

それは体も心も、そして頭だって、みんな同じだったはずだ。

そしてぼくはくじ引きからうまく逃れて、ただ道の端で応援するだけなのに……。 「イヤなこと」はもう、しなくてよくなったのに。

ほんとは痛くないのに痛いって、頭はなんで間違えちゃうのかな。

ああ、結局足のことを考えている。⁽¹⁾ 意識を飛ばすのって、難しい。ぼくはカバヒコの前にしゃがみ、カバヒコの後ろの右足をすりすりとなでながら、思わず話しかけた。

「走るのがこんなにイヤなんて、ぼくはほんとに弱虫でダメだな……。」「すると、「ダメじゃないぞ。」と声が出た。

びっくりした。

カバヒコが、しゃべった？

あたりを見回すと、いつのまにか、ブランコのそばにスグルくんがいた。

「走るのがイヤだと思うことなんて、ぜんぜんダメじゃない。イヤなものもイヤだろ。」

スグルくんはそう言って、上着の袖口で鼻水をぬぐった。何度もそうしているのか、袖口はもう、かぴかぴになっている。

ぼくはしゃがんだまま訊ねる。

「スグルくんも、本当は走るのイヤなんじゃないの？ 駅伝なんか、出たくないって思わないの？」

うーん、とスグルくんは首を傾けた。

「べつに、イヤじゃないよ。」

「でもスグルくん、走るのそんなに得意そうじゃないし……。」「

「そう、おれ、足遅いんだよなあ。」

だよね？ 走るの遅いってわかっているのに、どうして平気なんだ？

ぼくはその言葉を飲み込みながら訊ねた。

「……だって、みんなが見てる中を走らなきゃいけないんだよ？」

「うん？ ああ、そうだねえ。」

スグルくんは、へへへ、と笑った。

「駅伝、やったことないからさ。おれに番が回ってきたから、まずはやってみるっていう、それだけ。もしかしたら楽しいかもしれないし、やっぱりすごくだらだけかもしれないし、でもそれってやらないとわかん

ないじゃん。」

それを聞いてぼくは、なんだか息が止まるみたいない感じがした。

言葉も出ず、動くこともできず、まるでカバヒコと一体になったみたい
に固まっていると、スグルくんは急にちょこちょこ足踏みを始めた。

「じゃ、おれ、ここから走っていくから。自主練、自主練。この公園を
折り返し地点にしてるんだ。あとで学校でね！」

スグルくんは公園を去っていく。

自主練として、登校のときに遠回りして走ってるんだ。

ひとりで、ランドセルをしょったまま。

やっと、わかった。

ぼくの体と心が本当にイヤだったのは、走ること自体じゃない。

ただ、みんなにカッコ悪いところを見られるのがイヤだったんだ。

走るのが得意な子たちの中、もしもランナーになってしまったら、ぼ
くが出たとたん、あつというまにビリになってしまっだろう。

全学年の同じ組の子たちの怒りを買ひ、見ている人たち全員から笑わ
れ、駅伝当日だけじゃなくこれからのぼくの学校生活は絶望的になるだ
ろう。

ぼくの頭は、そう考えたんだ。

だからそんなこと、どうにかして避けなくちゃって。

スグルくんは、そんなことちっとも気にしていない。みんながどう思
うかなんて。

他の誰もやりたがらなかったランナーを、文句ひとつ言わず引き受け
たスグルくん。

得意じゃなくても、やるからには全力で取り組もうとしているスグル
くん。

ぼくが足を引きずっていることに、気がついてくれたスグルくん。
ぼくはスグルくんの強さも優しさも、まったくわかっていなかった。

カバヒコに頭を押しつけながら、ぼくはこらえきれずに泣いた。

涙と一緒に、勝手に言葉がこぼれてくる。

心と体が、カバヒコに聞いてもらおうとしているみたいだった。

「ぼくは……ぼくは、どうやったら自分が駅伝に出なくてすむかってこ
とばかりで……嘘について……それが思い通りにいったことで、ますます
苦しくなって……。」

そこではっとした。

今ぼくは、なんて言った？

⁽²⁾ ああ、そうか。そういうことなんだ。

体が緊張しているのは、ずるいことしたって罪悪感でびくびくしてい
るからだ。

頭が、間違えちゃったんだ。

ホントのホントは、嘘なんてつきたくなかったんだ、そうだ、ぼくは……。

そういう自分のことが、イヤなんだ……。

次の週、ぼくはまたお母さんと一緒に伊勢崎整体院を訪れた。

伊勢崎さんからの「ふたつの宿題」は、ぼくなりには仕上げてきたつも
りだ。

体のバランスを整える体操は、朝、学校に行く前と、夜、お風呂ふろに入っ
たあとの二回、毎日こなした。

そして「足から意識を飛ばす練習」は、伊勢崎さんの言うとおり、目
の前のことに集中するように心がけた。

びっくりした。意外な効果の連続だった。

たとえば、ごはんを食べるとき、何が入っていて、どんなふう調理されているかをちよつと注意して見るだけで、前よりもおいしく感じた。歯をみがくとき、歯のことだけを考えていたら一本ずついいねいにブラシを当てようという気になった。授業中、黒板に書かれていることをノートに写すとき、なるべくきれいな字で書くようにしたら内容をすぐ覚えやすくなった。

あたりまえのことかもしれない。

でも今までのぼくは、出された食事を特に気に留めずに口に入れていたし、歯磨きなんてささっと適当にブラシをくわえるだけだったし、黒板をろくに見ていないときさえあったのだ。

そしてその「練習」は、そのときだけじゃなく、普段の生活の中で意識が変わっていくことにつながった。

お母さんがいつもどうやって献立こんだてを決めているのか想像したり、歯ブラシの形や大きさにいろんな種類があることを知ったり、今まで好きじゃなかった教科にちよつと興味を覚えたり。

爪を切るときの自分の指の曲がり方、鉛筆の芯のにおい、傘にあたる雨音。目の前のいろんなことに集中してみると、それまで気がつかなかった発見がたくさんある。そうしているうちに、足のことを気に病む時間が少しずつ減っていった。

そして伊勢崎さんのところに行くころにはもう、足にとらわれなくなっていた。あんなに悩んでいたのに、いつのまにか痛みを忘れて、なんだか体がほかほかしていた。

前と同じようにふたりきりになった部屋で、うつぶせのぼくの体を手を当てた伊勢崎さんは「おう」と息をもらした。

「すごいな。一週間でこんなに整えてくるなんて、びっくりしたよ。体のこわばりもずいぶん取れて、やわらかくなってる。」

ぼくはうれしくなって、顔だけ伊勢崎さんのほうに向けて得意げに言った。

「ぼくの足、リカバリー*しましたか。」

伊勢崎さんは「ええ？」とちよつと笑ったあと、大きくうなずいた。

「そうだね、リカバリーしたよ。お見事だ。」

「じゃ、これで元どおりですね。」

カバヒコにお礼を言いに行かなくちゃ。

にやにやしながらベッドの穴に顔をうずめると、伊勢崎さんは穏やかに言った。

「ちよつと違うかな。人間の体はね、回復したあと、前とまったく同じ状態に戻るというわけじゃないんだ。」

「えっ。」

「病気や怪我けがをしたっていう、その経験と記憶がつく。体にも心にも頭にもね。回復したあと、⁽³⁾前とは違う自分になってるんだよ。」

ぼくは戸惑った。

穴から少しだけ顔を抜き、伊勢崎さんに訊ねる。

「前とは違って、良い自分なんですか、悪い自分なんですか。」

「それは僕には決められない。ただ、その人が良い方向に行くようにと願いながら、僕はこの仕事をしてる。少なくとも勇哉くんは、足が痛くなる前にはわからなかったことが、わかってきたんじゃないかな。だから、それをこれから良いほうに活かしていつてくれたらいいな。」

伊勢崎さんはそれから黙って、ぼくの体をいいねいに押し続けた。

ぼくは伊勢崎さんの指を背中に感じながら、ほんやりと、リカバリーのそのあとのことを考えていた。

(青山美智子「リカバリー・カバヒコ」による)

〔注〕リカバリー——回復。

〔問1〕⁽¹⁾ 意識を飛ばすのって、難しい。とあるが、このときの「ぼく」の気持ちの説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 駅伝に出場することを免れたにも関わらず、足の痛みにとらわれている自分の状況に困惑している。

イ 駅伝への出場を回避することができたものの、足の痛みの持続を願う自分を疑わしく思っている。

ウ 駅伝への出場をかるうじて逃れたことで、足の痛みが軽くなっている自分の状態に安堵している。

エ 駅伝に出場することが決まっても、足の痛みを口実に走ることから目を背ける自分を不思議に思っている。

〔問2〕⁽²⁾ ああ、そうか。そういうことなんだ。とあるが、このときのか。「ぼく」の様子説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 人目を気にせずカバヒコに自らの思いを語ったことで、スグルくんとの関係性を見つめ直している。

イ スグルくんととの会話を契機に自身の弱さと向き合い、努力を怠つてきたことを後悔している。

ウ スグルくんやカバヒコを介して自分自身を顧みたことで、心身を苦しめる原因に思い至っている。

エ 自問自答したことをきっかけに、困難に立ち向かうことを理想とする自分の本心に気づいている。

〔問3〕⁽³⁾ 前とは違う自分になってるんだよ。という伊勢崎さんの言葉について次の……のように説明するとき、

2 には当てはまる表現を本文中から 1 は十一字、

2 は十字で探し、抜き出せ。

伊勢崎さんからの宿題に取り組んだ後、「ぼく」は日常の中で

1 を体感し、以前の「ぼく」には 2 をすることができるようになった。

〔問4〕 本文において「ぼく」が捉えたスグルくんの人物像について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 周囲の意見をはばかり、自分のやりたいことを優先する意志の固さと、努力を怠らない忍耐力をもった人物。

イ 体面を気にするあまり嫌なことでも引き受けてしまう気弱さと、本心で語ることのできない臆病さをもった人物。

ウ 周囲の状況をすぐさま把握できる冷静さと、場に応じてうまく立ち回ることのできる器用さをもった人物。

エ 周りの視線に頓着せず、不得手なことにも懸命に取り組もうとする前向きさと、他者への思いやりをもった人物。

〔問5〕 次は、A～Dの生徒が、本文について話し合っている場面である。
あとの「i」「ii」の間にそれぞれ答えよ。

- A この物語の表現上の工夫は何かあるかな。
- B 擬態語が表現上の工夫として使われているよね。
- C うん。カバヒコの右足を「すりすり」なでているのが印象的な擬態語だったな。「ぼく」が足の痛みをカバヒコに治してもらおうとさすっている様子が思い浮かんだな。
- D スグルくんの描写では「かびかび」になるほど鼻水をぬぐったという場面と、「ちよちよこ」と足踏みをする場面があった。これらの表現はなんだか幼さやかわいらしさが印象づけられている気がするよ。
- B 擬態語にはその様子を想像しやすくする効果があるよね。他に「1」という擬態語は、回復した「ぼく」の身体的な感覚が表現されているような感じがする。
- A そうだね。表現技法って他にもいくつかあるよね。擬人法についてはどう？
- C たくさん使われているよね。例えば、「カバヒコがぼくを見て笑ってくれたように思えた。」とか。
- D 公園の遊具にすぎないはずなんだけれども、カバヒコっていう存在がこの物語ではとても重要だよな。
- A 「ぼく」にとってカバヒコは2なんじゃないかな。

〔i〕 1に当てはまる表現を本文中から探し、抜き出せ。

〔ii〕 2に当てはまるものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

- A あらゆる困難に対する解決策を即座に示してくれる都合のよい存在
- イ 自分の胸の内を素直に吐露できる心のよりどころのような存在
- ウ 知られたくない自分の過去を全て見抜いている近寄りがない存在
- エ 周りから否定されてしまった自分を助ける精神的支柱のような存在

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

最適化のアルゴリズムの背景には、どのような思想が潜んでいるのでしょうか。

ア おそらくそれは、「人間が好きなものには一定のパターンがあり、そのパターンを学習すれば、その人間の行動は予測できる」というものではないでしょうか。

そのような予測をするには、膨大なデータベースが必要です。「私」の行動を予測するためには、まず、「私」以外の無数のユーザーが何を検索し、どんなサイトを閲覧し、何を買っているのかを把握しなければなりません。そのデータベースから、「ある特徴を持つユーザーがどんな行動をするのか」というパターンが分析されていきます。そして、そのパターンのなかに「私」を位置づけることで、「私」の行動を予測することがはじめて可能になるのです。

(1) このような考え方は、非常に大きく言えば、世界を科学的に捉えようとする態度と通底するものです。科学は、この世界に起こる事象を法則に基づいて説明しようとします。そこで理想とされるのは、すべての自然現象を説明することができるような、一般的な法則を解き明かすことです。そうした法則が解明されれば、これから起こるすべての自然現象は完全に予測可能になるでしょう。

気象予報をはじめとして、このような科学的な予測は、いまだ不確実性の残るものだとしても、私たちの日常生活にとって欠かせないものになっています。しかし、科学的に説明された自然現象からは、個性が失われます。たとえば気象予報において、降雨の法則が完全に明らかになれば、今日降った雨の状況から、明日降る雨の状況を予測することができます。科学的に考えれば、降雨の法則に同じように従うという意味において、今日の雨と明日の雨にちがいはありません。

でも、私たちはそこにちがいを感ずることもできます。たとえば、まったく同じ降水量だとしても、今日の雨はなんだか物悲しく感じ、寂しい気持ちにさせるけれど、次の日の雨は、なんだか傍そばに寄り添ってくれるような、親しみのある雨になるかもしれません。そのように、今日の雨と次の日の雨はまったくちがったものになるかもしれません。雨にもそうした個性があるのです。それなのに、雨を科学的に説明しようとした途端、そのちがいは失われてしまいます。雨は法則に還元され、そのときそのときの雨が持っている個性は見失われてしまうのです。

同じことが、アルゴリズムに基づく行動予測にもあてはまります。たとえば「私」はロック音楽が好きだとしましょう。しかし、同じ曲を聴いているときでも、今日聴いているときの気持ちと、明日聴いているときの気持ちは、まったくちがうかもしれません。ある曲を今までに100回、同じような気持ちで聴いていたのに、次の1回は今までとまったくちがった印象を受け、まったくちがう気持ちになるかもしれません。音楽を聴くという体験にも、1回1回の個性があるのです。それに対して、アルゴリズムによる行動予測は、そうした個性を無視することになってしまいます。

この問題を鋭く洞察した哲学者がいます。フランスの思想家、アンリ・ベルクソンです。

ベルクソンは、この世界をただ科学的にだけ説明しようとする考え方を痛烈に批判しました。彼によれば、そうした説明はこの世界を抽象的に眺めてなされるものであり、その具体的な姿を捉えることにはなりません。もちろんそれは、科学がまちがっているとか、信頼に値しないとかいうことを意味するわけではありません。ただ、それだけでは捉えつくすことのできないものが、この世界にはある、と彼は考えたのです。

まず、この世界を抽象的に眺めることと、具体的に眺めることとのちがいがどこにあるのかを考えてみましょう。さしあたりそれは、「未来

を予見可能なものとして捉えるか、それとも予見不可能なものとして捉えるのか」というちがいで説明することができます。

たとえば、気象に関する科学的な知識やデータを動員すれば、「明日、雨が降る」ということを予測することはできます。このとき予測されているのは、いわば「抽象的な雨」です。つまり、いつ、どこで降る雨とも等価であり、同じような条件であれば同じように降る雨です。それに対して「具体的な雨」は、「私」にとって個性を持っています。そしてその個性は、科学的には予測することができません。明日降る雨の量を科学的に予測することはできません。⁽²⁾しかし、それが「私」にとつてどのようなものとして経験されるのか、ということは、事前に予測することはできないのです。

「ある出来事が予見不可能である」ということは、それが「偶然に起こる」ということです。つまり、それはそのように起こらないこともできるのに、そのように起こらなければならない理由などないのに、そのように起こってしまうということです。だからこそ、この世界をその具体的な姿において眺めたとき、世界は偶然の連続であるように見えます。次の瞬間に何が、どのように起こるか、まったくわからないのです。

ベルクソンは、こうした偶然性を前提にしなければ説明できない現象が、この世界にはあると考えました。その例として挙げられるのが、生命の進化です。生命は同じ姿のままに留まることなく、時間をかけて変化し、ときに信じられないような形態を獲得します。ベルクソンは、生命が時折見せるこうした偶然的な変化を、「創造的進化」と呼びます。

科学的な世界観に従うなら、生命の進化も含め、この世界で起こることとはすべて何らかの法則に従っている、ということになるはずですが。しかし、現実の世界には、法則には還元できない、誰にも予測できないことが起こり、それによって新しいものが、それまでは思いつくことさえ不可能だったことが引き起こされるのです。

ベルクソンは、こうした⁽³⁾予見不可能な創造的進化は、「私」をとり巻く外界の世界の事物だけではなく、「私」自身に関しても起こる、と考えていました。

たとえば、多くの人は、小学生のときの「私」も現在の「私」も、どちらも同じ「私」だ、と考えているでしょう。そのとき、その人はおそらく、「私」という変わることはない実体がまずあり、その実体が誕生から小学校時代などを経て現在までの、さまざまな状況を移ってきた、というふうには理解しているのではないのでしょうか。それはたどって言えば、「私」を一つのボールとして捉え、そのボールの置かれる部屋が時につれて移っていく、しかし、同じボールであることに変わりはない、と考えることに似ています。

しかしこれは、「私」⁽⁴⁾をただのモノのように捉える考え方であり、その意味で科学的な見方である、と言えます。それに対してベルクソンは、「人間はあくまでも生命であり、単なるモノではない」という点を強調します。そして生命である以上、「私」もまた、予見不可能な創造的進化を遂げるのです。

もつとシンプルに言えば、このことは、明日の「私」がどんな人間かは、まだわからない、ということでもあります。明日の「私」が何者であるか、この世界をどのように感じ、どんな気持ちで生きるのかは、予測できません。時間の経過が私たちの存在を、常に新しいもの、別なものに変えていくからです。

しかしそれは、「私」が一瞬ごとに異なるバラバラな人格になる、ということではありません。確かに、昨日の「私」と今日の「私」、明日の「私」は、それぞれちがった存在です。しかし「私」は記憶によってその時間の経過を自分のなかに宿すことができる、とベルクソンは考えました。つまり、一瞬ごとに新しい存在である人間は、同時に、これまでの自分の歩みを「記憶」という形で保持し、それを更新しつづける

存在でもある、ということ⁽⁵⁾。ベルクソンは、そうした記憶に宿る時間のあり方を「持続」と呼んでいます。

SNSを支配する最適化のアルゴリズムは、このように生きる人間の具体的な時間を、正しく捉えることができません。なぜならアルゴリズムは、あるときに捉えた「私」のデータに基づいて、「私」はどんな場合にも同じ好みを持ち、同じものに関心を寄せ、これまで関心を寄せてきたものにこれからも関心を寄せつづけるだろう、という考えのもとに動作するからです。しかし、それは真実ではありません。私たちは、昨日まで関心があったことに、今日、関心がなくなるかもしれないし、あるいは今日関心がないことに、明日、突然関心を持つかもしれないからです。それこそが、生命の創造的進化にほかならないのです。

^エもつとも私は、こうした理由で、「SNSを支配するアルゴリズムによって、私たちは自分自身を創造する機会——つまり今までとは異なる、新しい存在になる機会を奪われている。だからSNSを使うのをやめよう」と言いたいわけではありません。私たちはこれからも、アルゴリズムの提供する偶然性のない世界のなかで、これまでと同じような人と友達になるかもしれません。これまでと同じような動画を見て、同じような音楽を聴くのかもしれません。しかし大切なことは、その一回一回の体験は、それぞれちがっているということです。そして、「私」がどんな体験をするかは、実際にそれを体験するまではわかりません。そこには、アルゴリズムにも征服することのできない、生命の予見不可能性が、根本的な偶然性が潜んでいるからです。

(戸谷洋志「SNSの哲学」(一部改変)による)

〔問1〕⁽¹⁾ このような考え方は、非常に大きく言えば、世界を科学的に捉えようとする態度と通底するものです。とあるが、どういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

- ア 最適化のアルゴリズムと科学は、一定の法則を導き出せば個別の事象は説明可能だという共通の発想に基づいて成立しているということ。
- イ 科学は起こりうるすべての現象を説明可能であり、最適化のアルゴリズムも無数のユーザーの未来の行動について予見できるということ。
- ウ 最適化のアルゴリズムが蓄積された多様なデータに依存しているのと同様、科学も個々の事象における差異に着目しているということ。
- エ 科学も最適化のアルゴリズムも、具体的な自然現象や人間の行動から一般的な法則を求め、世界を質的に説明する点で同一だということ。

〔問2〕⁽²⁾ しかし、それが「私」にとってどのようなものとして経験されるのか、ということとは、事前に予測することはできないのです。とあるが、なぜか。その理由に当たる最も適切な表現を本文中から三十四字で探し、その始めと終わりの五字を書け。

〔問3〕⁽³⁾ 予見不可能な創造的進化とは、どういうことか。次のように説明するとき、に当てはまる最も適切な表現を本文中から七字で探し、抜き出せ。

生命の変化は、を前提にしているということ。

〔問4〕「私」をただのモノのように捉える考え方は、どういうことか。
次のうちから最も適切なものを選び。

ア「私」という人間は、推移していく環境に対応できる柔軟性を持つ実体だと理解すること。

イ「私」という人間は、抽象化することが難しい固有性を備えた実体であると解釈すること。

ウ「私」という人間は、時代の状況に影響を受け徐々に形成されてきた存在だと見なすこと。

エ「私」という人間は、一貫性を保持した年月を経ても変わらぬ存在であると認識すること。

〔問5〕本文の表現と構成について、次の「i」「ii」の間にそれぞれ答えよ。

「i」二重線を引いた語句における表現の特徴について説明したものとして、次のうちから最も適切なものを選び。

ア「おそらく」という表現は、筆者自身が自分の主張に疑念を抱いていることを読者に強調する効果がある。

イ「さしあたり」という表現は、今後は理解の仕方が変わるかもしれないという筆者の危惧の表れである。

ウ「確かに」という表現は、読者の一般的な認識を踏まえた上で論を展開しようとする筆者の工夫である。

エ「もともと」という表現は、本文で言及されていない筆者の考えを読者に類推させるねらいがある。

「ii」本文の構成について説明したものとして、次のうちから最も適切なものを選び。

ア問題提起を行ってから個別の具体例を列挙して共通点を見出し、そのうえで出された結論を主張として提示している。

イ冒頭で問題提起を行い、次に抽象化された主張を展開したうえで、最後に具体例を複数挙げながらまとめを示している。

ウ問題提起をしたうえで、例示や引用によって具体的に述べることと抽象化することを繰り返しながら、結論を導いている。

エ導入部で例を示しながら問題提起をし、展開部で主張と論拠を述べ、結論部で異なる視点からの自説を述べて総括している。

〔問6〕本文を読んだ後、SNSに興味を持った生徒たちは、出典の『SNSの哲学』を読み、レポートを作成することにした。次の文章は、ある生徒が作成したレポートの一部である。□に当てはまるものとして、適切でないものは次のうちではどれか。

本文では、アルゴリズムによる行動予測が私たちに与える影響に言及していたが、出典では、SNSでニュースを入手する場合について、以下のように述べられていた。

新聞では、その日のトップニュースとして一面にどんなニュースを掲載するかを新聞社が判断しています。そして、他のどのニュースをどれくらい大きく掲載し、それぞれ何文字の記事にするのか、ということもまた、新聞社が決めています。そうした判断を左右しているのは、アルゴリズムではなく、「社会

にとって何が重要なのか。何が優先されるべき情報なのか」という、その新聞社が持っている価値観にほかなりません。

新聞は紙です。そこには必ず容量の限界があり、情報を無限に載せることはできません。だから、重要な情報とそうでない情報を区別しなければならぬのであり、その判断に、新聞社の会社としての信念が表れるのです。もちろん、読者がどんな情報を知りたいと思っているのか、ということも、新聞社は予測しているでしょう。しかし、「私たちとしてはこうしたことが今の社会にとって重要だと思っている」という会社としての意見がなければ、よい新聞社とは言えません。読者は、そうした新聞社の感覚を信頼するからこそ、その新聞に価値を感じ、お金を払って購読するので。

一方、SNS上で、アルゴリズムによって表示されるニュースは、誰かの信念に基づいて選ばれているわけではありません。単にたくさんの人が見ているから、画面に表示されているにすぎないのです。しかし、たくさんの人がそれを見ているということ、それに関心を抱いているということが、ニュースの重要性を決めるいちばん大切な要素であるとは限りません。

たとえば、政策に関する難しい話は、それに関する知識がないとなかなか理解できないものです。したがって、もし何らかの難しい、しかし重要な政策が変更されようとしても、そのニュースは多くの人から好んで見られるものとはならないかもしれません。とはいえ、それが私たちの社会にとって極めて重要な情報であることは明らかです。しかし、そうであるにもかかわらず、あまり多くの人が閲覧しないニュースは、SNSのアルゴリズムでは価値があると判断されず、画面に表示されにくくなります。その結果、SNSでニュースをチェックしている人には届かなく

なってしまうのです。

〔戸谷洋志『SNSの哲学』〕

本文も踏まえて考えると、SNSを利用する場合、私たちは閲覧数や自分のこれまでの関心に基づいて取捨選択されたニュースを見ることになり、と考えられる。

ア 考え方が均質化されていく懸念がある

イ 物事を批判的に捉えやすくなる恐れがある

ウ 思考の偏りが助長される危険性がある

エ 多様性に気付きにくくなる可能性がある

〔問7〕⁽⁵⁾ ベルクソンは、そうした記憶に宿る時間のあり方を「持統」と呼んでいいます。とあるが、あなたが実感した「持統」の経験について、

ベルクソンの主張を踏まえながら具体的な例を挙げ、二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄や、や・や」などもそれぞれ字数に数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、「（ ）」内は現代語訳を補ったものである。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

すぐれた短詩こそは「詩」そのものだとして、それでは詩とは何か。真正面からそう問うてみると、にわかには強い光彩を帯びて立ち上がってくるのが、よく知られた芭蕉（はしやう）のことばである。それを手がかりに、あらためて短詩のありかたを考えてみたい。

芭蕉の発言（『去来抄』）のきっかけは、弟子其角（きかく）の句である。

（1）
下臥（したぶ）しにつかみ分けばやいとざくら

堀切実（ほりきりみのる）によれば、句意は「美しく咲き乱れた枝垂桜（しだれざくら）の下に仰向けに臥（ふ）して、その咲き乱れて地上近くまで垂れさがった花の枝を思いきりつかみ分けてみたいものだ」。芭蕉は去来に向かつて、其角はいつたいどんなつもりでこれを自分の撰集（せんしゅう）に入れたのだろうかと問う。去来が「糸桜（いとざくら）の十分に咲きたる形容、よくいひおほせたるに侍（はべ）らずや」「糸桜が十分に咲いている様子を、よく言い尽くしているのではないでしょうか。」と問い返すと、芭蕉は言う。「いひおほせて何かある」「言い尽くしたからといって何になるのだ。」しだれ桜は地面すれすれにまで垂れ下がる。そこから、地面に寝転んで仰向きにそれを眺めたい、それどころか、花盛りの枝を手で掻き分けてみたいという発想が生まれる。去来の言うとおり其角の句は、しだれ桜のしだれ桜らしさを巧妙に言い尽くして余すところがない。だが芭蕉は、それがどうしたと言う。

これは一つには、いかにしだれ桜独特の姿を言い当てているとはいえず、仰向けに寝そべて桜を手づかみにしたいなどという、いかにも其角らしい放胆（はつたん）な機知（きち）のひけらかしに対する批判の表（あら）われだろう。「松のこと

は松に習へ」（三三冊子））と言う芭蕉の目から見れば、ここには「花」「桜」というもつとも重大なテーマの一つへの配慮、畏敬（おそ）の念が見られない。

とはいえむろん、「いひおほせて何かある」という思いきった一般論の意味合いは、芭蕉のそうした伝統主義的美学の次元にはとどまらない。このすぐあとで、去来は「ここにおいて肝に銘ずる事あり。初めて発句になるべき事と、なるまじき事を知れり」「これを聞いて私は深く心に刻みつけられるものがあつた。発句に成り得ることと成り得ないことの区別をはじめて知つた。」（『去来抄』）と述べている。ここで去来が言う「発句」は、独立した短詩と読み替えることができる。連句の句のなかで発句だけが、前後の句の支えなしでも詩として自立できることが求められるからである。

ただし、ここで付言しておかねばならないのは、俳句のような短詩の大きな魅力の一つが、まさに対象をたくみに「言い尽くす」こと、誰にもなじみ深い景物や人情の一こまをずばりと「言い当てる」ことにあるという点である。よくぞわずかな語数でこれだけのことを言い切つたものだと感嘆させられる例は、俳句や短歌にはいくらかもある。そもそも十七字で何かを「言いおおせる」だけでも、並外れた技量や修練を要するのであって、豊かにしなやかに垂れ下がる糸桜の姿をみごとに表現した其角が、それを自慢に思うのもむりはない。

だが、発句で何かを言い尽くしてもしょうがない、と芭蕉はいう。これをどう解すればいいだろうか。むろん、そもそもわずか十七音の「詩」のなかで何かを言い尽くすとは、具体的に一体どういうことなのかという根本的な疑問がまず湧いてくるが、いまはそれを問わないことにしよう。むしろこの芭蕉の発言を、ものを言い尽くさないこと、言い残すこと、意図的に空白や亀裂を設けることを作句の要諦（ようてい）とする、という積極的な教えとして受け取ってみよう。

句を作るとは、目や耳に触れたもの、心に感じたことを、そのまま素

直に「述べる」ことだと信じている人は少なくない。「写生」という耳に入りやすい（実は、きわめて厄介な問題を含んで複雑な）スローガンが、そうした思い込みを助長しているかもしれない。だが、ちよつと考えてみれば明らかのように、たとえ「詩」でなくてさえ、たった十字や二十字で何か面白いことや意味深いことを「言い尽くす」ことは、けつして生易しいことではない。『論語』の、

朽木は雕るべからず、糞土の牆は塗るべからず。

（朽ちた木には彫刻ができないし、腐った壁は塗り替えがきかない）

とか、ラロシユフーコー『箴言集』の、

自己愛は、お世辞にかけてはとびきりの名人だ。

などは、⁽²⁾その難事をあざやかにし遂げた珍しい例だからこそ、いまだに人類の記憶に焼きついているのだが、それでもこれらを詩と呼ぶことはできない。なぜなら、これらはある真理ないし観察の結果を、まっすぐ言わず、やや横道（ここでは比喩）にそれではいるものの、たしかに十分言い尽くしたものだからである。他の多くの諺や格言の場合と同様、読者はここでもその「真意」を求めて、しばらく手探りの回り道を楽しんでから、やがてただ一つの正しい意味に到達し、それでなるほどと納得して終わる。

ところが⁽³⁾俳句をも含めて、「詩」はなるほどと意味を納得して終わるものではない。何度でも新鮮なことばの回り道を楽しみながら、いつまでもその意味を探り、考えあぐねるものである。言い換えれば詩とは、思いがけない表現の魅力によって、読者をそうした回り道に誘い込み、そこから当てどのない意味探索の旅に連れ出すようなことばのしかけで

あり、わなであるとも言えるだろう。

蛸壺^{たじろ}やはかなき夢を夏の月 芭蕉

〔海底では蛸が罨^{おぼ}とも知らずに蛸壺の中にすっぽり入って、明けやすい夏の夜のはかない夢を見ていることだろう。〕

閑さや岩にしみ入^{いれ}蝉の声 芭蕉

〔夕暮れの立石寺は、物音一つせず静まりかえっている。その静寂の中で、ただ蝉の声だけが、岩にしみいるように聞こえる。〕

これらの句は、何事も言い尽くしてはいない。語り手が目にし、耳にしたことをただ「素直」に述べたものでもない。それどころか、むしろ⁽⁴⁾これ見よがしに多くを言い残し、舌足らずで辻褃^{つじま}の合わない表現や、ちぐはぐで不調和なイメージによって読者の意表を突くことで、これはいったい何を言いたいのだろうかという好奇心を掻き立てようとする。卑俗でユーモラスな「蛸壺」と、王朝風に典雅な「はかなき夢」、そしてさわやかで涼しげな「夏の月」の組み合わせは、不釣り^{ふりり}合いそのものである。その上、「蛸壺や、はかなき夢を、夏の月」というこま切れの発話は、「や」で止まり、「を」で途切れ、「月」という名詞で結ばれて、そもそも文法的な文の体をなしていない。

一方、「閑さや」の句のほうには、「蛸壺や」ほどの文法的な乱れがないとはいえず、「や」で投げ出し、体言止めで突き放すという素っ気なさ、文としてのまとまりの悪さという点では、ほぼ同じである。その上、液体でも匂いでもない蝉の声が固い岩に「しみ入」と言い、騒がしい蝉しぐれを「閑か」と言う。これほど穴だらけ、矛盾だらけの発言で、何が述べ尽くされたと考えることは、到底できない相談だろう。これらの句は明らかに、わざとすべてを言い尽くさず、多くの肝心な部分を残しているのである。

では、こうして語り手がちらりとヒントを出すだけで言い残した部分

を補い、「その先」にあるはずの深い意味を句から読み取るのは誰か。それは言うまでもなく読者である。俳句も詩の一種だから、小説や映画よりも読者の積極的な参加、つまり創造的な読み取りの努力に依存する部分があるかに大きい。まして俳句のような短詩型は、句の余白を埋めようとする読者の協力なしには、ほとんど成り立たないジャンルだと言つてよからう。

(川本皓嗣「俳諧の詩学」による)

〔注〕『去来抄』——芭蕉の門弟である去来が書いた俳論。

其角——江戸時代の俳人。芭蕉の弟子。

放胆——思い切りがよく、大胆な様子。

『三冊子』——芭蕉の門弟が書いた俳論。

畏敬——心から敬うこと。

要諦——物事の大切な点。

『箴言集』——ラロシユフコーの格言集。

〔問1〕⁽¹⁾ 下臥しにつかみ分けばやいとぎくらとあるが、この其角の句を去来と芭蕉はそれぞれどのように捉えたか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 去来は、対象の個性を余すところなく表現していると賞賛したが、芭蕉は、伝統主義的美学に固執していると非難した。

イ 去来は、対象への情愛、敬意に欠けると批判したが、芭蕉は、対象の見事さを言い尽くしていると評価した。

ウ 去来は、対象の特徴を見事に表現していると評価したが、芭蕉は、自らの鋭い発想を自慢しているに過ぎないとした。

エ 去来は、対象の特徴を踏まえて自らの願望を詠み込んだと見抜いたが、芭蕉は、対象を描写する力の不足と見なした。

〔問2〕⁽²⁾ その難事をあざやかにし遂げた⁽¹⁾とあるが、どういふことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 短い言葉でありながら物事の本質を的確に示し、読者の得心がいくよ⁽²⁾うな表現になっているということ。

イ 比喩を用いた回りくどい表現であるがゆえに、核心部分が曖昧に表現されているということ。

ウ 端的に人生の教訓を表現しているにも関わらず、多様な解釈を可能にしているということ。

エ 感受したことを直接的に描き出したもので、読者の誤解を招きにくい表現になっているということ。

〔問3〕⁽³⁾ 俳句をも含めて、「詩」はなるほどと意味を納得して終わるものではない。とあるが、どういふことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 「詩」は、読者が主体的に読み取る努力をせずとも語り手が想定した主題を理解できるものであるということ。

イ 「詩」は、語り手が作り出した意味の余白を読者が創造的に読み取る協働によって成立するものであるということ。

ウ 「詩」は、読者が深い意味をくみ取ることによって生じた空白や余白を自ら楽しむものであるということ。

エ 「詩」は、語り手の意図しない形で生じた空白や亀裂のおもしろみを読者が読み味わうものであるということ。

〔問4〕⁽⁴⁾ これ見よがしにとあるが、次のア～エの——線を付けた語のうち、この「これ見よがしに」と同じ意味で用いられているものはどれか。

次のうちから最も適切なものを選び。

ア 親友の頼みをむげに断れない。

イ 彼は誇らしげに結果を報告した。

ウ 彼女は切なげにほほんだ。

エ 妹は思い出を樂しげに語った。

〔問5〕 本文中の内容に合致するものとして、次のうちから最も適切なものを選び。

ア 其角の句をめぐる去来と芭蕉のやり取りを提示し、その中で去来が芭蕉を否定することで到達した「発句」の境地について持論を展開している。

イ 芭蕉の句に関する考え方の元となった「写生」という概念に触れつつ、十七文字で何かを言い切る芭蕉の並外れた技量や修練について評価している。

ウ 対象のすべてを的確に表現することを是とする句の魅力を完全に否定し、空白や亀裂をあえて入れ込む芭蕉の句が正しいあり方だと結論づけている。

エ 芭蕉の「蝸壺や」、「閑さや」の二つの句を引用し、その文法的・言語的な違和感を指摘しながら、余情という概念をわかりやすく説明している。

7

7

7

五

五